

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K01132

研究課題名(和文)メタ認知促進プログラムによる教師の指導行動改善に関する研究

研究課題名(英文)Research on Improvement of Teachers' Teaching Behavior through Metacognitive Promotion Program

研究代表者

鹿嶋 真弓(Kashima, Mayumi)

立正大学・心理学部・特任教授

研究者番号：10644362

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、教師の指導行動を、教師のメタ認知の向上を通じて改善し、その効果検証を実践場面において多角的に行うことで、その有効性をさらに高めることを目的に、以下3研究を行った。それらは、「蓄積データ」実施による「教師の変化」について、1)質的な側面から検討、2)量的な側面から検討、3)「蓄積データ」を行うことでの、「児童・生徒の変化」についての検討であった。

これらより、「蓄積データ」を実施した教師にとって、全体的にポジティブな評価を受け、その有用性を感じていることが明らかになった。また、児童・生徒においては、学級の風土、クラス内における社会的行動が、有意に高くなることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学校現場では、いじめや学級崩壊、不登校など、児童生徒を取り巻く課題が山積みされている。そのため学級は十分な機能を果たしにくい。このような状況の中で、教師の指導力不足の解消、あるいは教師の自身の指導方法への固執の解消は、学校現場において取り組むべき急務であると考えられる。

そこで、教師が生徒への生徒指導上の指導方法がうまくいっているか否かについて、自ら客観的に気づくことができるようなプログラムとして開発したものが「蓄積データ」である。本研究は、この「蓄積データ」を活用し、教師の指導行動を教師のメタ認知の向上を通じて改善し、その有効性をさらに高めることに対して、一定の知見を提供しうる点に意義がある。

研究成果の概要(英文):In this study, the following three studies were conducted with the aim of improving teachers' teaching behavior through the improvement of teachers' metacognition and further enhancing its effectiveness by verifying its effects from multiple angles in practical situations.

研究分野：教育心理学

キーワード：教師の指導行動 メタ認知 蓄積データ 問いを作る授業

1. 研究開始当初の背景

今日の学校現場では、いじめや学級崩壊、不登校など、児童生徒を取り巻く課題が山積みになっている。そのため学級は十分な機能を果たしにくい。学級経営研究会の「学級経営をめぐる問題の現状とその対応」に関する研究結果では、学級崩壊の3割は教師の指導能力を超えた問題であるが、7割は「教師の指導力不足」が原因であることが明らかにされた(文部科学省, 2000)。さらに、全国150事例のうち「教師の学級経営が柔軟性を欠いている」というケースが104学級と最も多かった。さらに、「子どもは変化しているにもかかわらず、ベテラン教師の中には、以前の指導方法に固執し、時代の変化に対応できず学級崩壊を引き起こす例が多い」という結果が示された。

これらの状況から、教師の指導力不足の解消、あるいは教師の自身の指導方法への固執の解消は、学校現場において取り組むべき急務であると考えられる。実際に、学級崩壊を起こしている学級の担任教師や、児童生徒との関係がうまくいかないと感じている教師に対し、学級経営スーパーバイザーとして介入する際、その教師の持ち味を活かしつつ、指導方法を変えることは大変難しい。そこで鹿嶋(2016)は、このような現状に対し、教師の指導行動の改善をめざし、「蓄積データ」という方法を提案している。「蓄積データ」とは、Fig. 1に示すように、各指導場面における「課題」、その場面で取った指導行動「やってみたこと」、そして、それに対する「結果」を記録する方法である。

課題	やってみたこと	結果
授業中騒がしい	しつこく注意した	-
授業中騒がしい	机間指導を増やした	±
授業中騒がしい	授業でやることを黒板に箇条書きにした	+

Fig.1 「蓄積データ」の実施例

鹿嶋(2016)は、教師が自身の

指導行動を記録することで、その指導行動が児童生徒の適切な行動変容につながっているのかを観察し、自らの指導方法を修正する方向へと向かいやすくなり、指導に固執することなく学級崩壊を未然に防ぐことができるとしている。すなわち、自らの指導行動を自身で俯瞰するメタ認知の能力がつけば、教師の指導行動の改善につながると考えている。メタ認知とは、認知についての認知のことであり、一般には、認知のセルフ・モニタリングとセルフ・コントロールの働きとして知られている(多鹿, 2010)。セルフ・モニタリングの概念は、Sunder(1974)によって提唱され、対人場面での自己呈示や感情表出を調整・統制する特性として定義されている(岩淵・田中・中里, 1982)。生徒との対面場面の多い教師にとってセルフ・モニタリングの能力は重要な資質の一つであり(天根・川原, 1987)、また、Sunder(1974)は、セルフ・モニタリング傾向の高い者は状況に応じて行動を決定することができることを示唆している。一方、セルフ・コントロールは自己の行動を統制する特性として定義されている(Thoresen & Mahoney, 1974)。また、セルフ・コントロール傾向の高い者は、良い対人関係を形成することが明らかにされている(Tangney, 2004)。すなわち、これらの要素を含むメタ認知を向上させることは、教師の指導行動の改善に有効であると考えられる。以上から、メタ認知に着目した、鹿嶋(2016)の提案する「蓄積データ」の方法論は、教師の指導行動の改善に有効であると考えられ、現場での活用は進んでいる。しかし、その効果は実証研究において明らかにされていない。そこで、本研究では、「蓄積データ」の多面的な効果検討を行い、エビデンスに基づいた形での、有用な教師の指導行動改善プログラムを提案することを目的とする。

2. 研究の目的

以上から、本研究では、教師を対象として、「蓄積データ」の方法を用いた介入を行い、その効果を検討する。効果の検討に関しては、教師側の変化と児童・生徒側の変化の両側面から行い、特に教師側の変化に関しては、質的な側面と量的な側面からの検討を行う。

具体的には、以下の3つの研究を行う。(1)「蓄積データ」実施による「教師の変化」について質的な側面からの検討を行う。(2)「蓄積データ」実施による「教師の変化」について量的な側面からの検討を行う。(3)「蓄積データ」を行うことでの、「児童・生徒の変化」についての検討を行う。これらの検討を通じて、教師の指導行動改善プログラムである「蓄積データ」の多面的な効果検討を行う。

3. 研究の方法

(1)および(2)においては、「蓄積データ」を実施した経験のある教師に対して質問紙調査を実施して、データ分析を行った。(3)について、質問紙調査を行った。さらに、聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1)「蓄積データ」実施による「教師の変化」について質的な側面からの検討について、「蓄積データ」実施による「教師の変化」について質的な側面からの検討をするために、その有効性に関する検討を行った。中学校に勤務する「蓄積データ」を実施した11名の教員に対して、「全体的評価」、「個人内変化」、「生徒の変化」、「負担感」の項目および「蓄積データの改善点」について、具体的にどのように感じたか、あるいはどういった点でそのように感じたかについて自由記述形式による回答を求めた。その結果、第1に、全体的評価に関するポジティブ

な記述をみると、有用性を感じ、指導行動を変化させていく意識の向上や教師の主体性がみられ、変化に対する好感が起き、思考や方法の共有が行われていることが明らかになった。学年や学校で取組むことで、思考や方法を共有することができ、同僚性も高まったとも考えられる。そして、同僚の取り組みを見ることで、自分にはなかった行動のレパートリーが増えたと考えられる。また、生徒のせいにするのではなく、自分たちに何ができるかを考えたり、変化を起こそうとする働きについて考えようとしたりと、教師の主体性が伺える。さらに、生徒にプラスの変化が起こった時に嬉しいと感じることは、教師の柔軟な指導行動の強化へとつながると考えられる。以上から、「蓄積データ」を行うことで、効果的な指導行動を知ることができるのみならず、指導行動の変化に対する主体性や、指導行動を変化させる動機づけが高まったことが推察される。第2に、全体的評価に関するネガティブな記述をみると、十分な活用ができていないこと、取り組みへの意識の低い教員がいること、やり方や評価基準の不明瞭さ、それらに対する対策として専門家の必要性を感じていることが明らかになった。以上から、蓄積データの実施前に、蓄積データの意義や理論的背景について共通理解するための研修会等を行うことで、教師の「蓄積データ」への動機づけを高めることができると考えられる。同時に、蓄積データの記録の仕方についても、記入例を示しながらより具体的に提示することが必要と考えられる。

(2)「蓄積データ」実施による「教師の変化」について量的な側面からの検討について、「蓄積データ」実施による「教師の変化」について量的な側面からの検討をするために、その有効性に関する検討を行った。中学校に勤務する「蓄積データ」を実施した教員11名に対して、「全体的評価」、「個人内変化」、「生徒の変化」、「負担感」、「有用度」について5件法で尋ねる質問紙調査を行った。その結果、「蓄積データ」を実施した教員にとって、「蓄積データ」は、全体的に実施して良かったと思われるしており、また今後の指導に有効であると認知されていることが明らかになった。また特に、教師自身の変化について、有効であることが示唆された。一方で、生徒の変化については、教師はあまり感じていなかった。これは、「蓄積データ」がもとも教師教育の方法論として開発されており、生徒への効果は、波及的なものになるためだと考えられる。教師が生徒の変化を感じていないにしても、教師の指導行動の変化によって、生徒が変化する可能性は十分に考えられ、今後、生徒にも教師の「蓄積データ」実施前後での自身の変化を尋ねていく必要があると考えられる。負担度については、分析の結果、有意な差はみられず大きな負担とはならないことが示された。文部科学省(2017)の教員勤務実態調査などから教員の多忙が進んでいることが示されており、いかに現場に負担をかけずに教師教育を行っていくか、という命題は極めて重要であると考えられる。「蓄積データ」がそれほど大きな負担を強いけない方法論であることが示されたことは、教師教育の方法論としての大きな強みとして考えられよう。

また、「蓄積データ」を実施した小中学校教員54名を対象に「蓄積データ」を実施した前後の指導行動を比較する質問紙調査を実施した。その結果、「蓄積データ」を実施する前に比べて、実施した後では、児童生徒理解や指導技術の得点が高まり、また、指導の柔軟性や指導に対する内省の得点が高まることが示された。この結果から、「蓄積データ」の方法論は教師の指導行動の改善について有効であることが示唆された、特に「蓄積データ」の狙いであるメタ認知の向上が起きている可能性が示唆された。

そして、(3)「蓄積データ」を行うことでの、「児童・生徒の変化」についての検討について、「蓄積データ」を行うことでの、「児童・生徒の変化」についての検討を行った。小学生700名、中学生1600名を対象に調査を行った。その結果、学級の風土、クラス内における社会的行動は、「蓄積データ」実施前より実施後で、いずれも有意に高い値を示した。

さらに、「蓄積データ」実施による「児童・生徒の変化」についての検討については、学校生活場面だけでなく、授業場面における活用も視野に入れ行った。その結果、「蓄積データ」を一覧表に記入していくことで、主体的対話的で深い学びの授業方法のひとつである「問いを創る授業」における児童・生徒の言葉で表現される「問い」と授業のねらいの一致率が徐々に上がることが、授業者への聞き取り調査により明らかになった。また、(3)に関する研究成果の公表については、「子どもの言葉で問を創る授業 小学校編」(学事出版)および「子どもの言葉で問を創る授業 中学校編」(学事出版)の書籍の中で、授業実践における蓄積データの一覧表を示し、より多くの現場で活用できるよう紹介されている。

以上、(1)から(3)の成果をまとめると、教師の指導行動を教師のメタ認知の向上を通じて改善するための「蓄積データ」という方法は、教師が主体となって指導行動を変化させる動機づけが高まったことが推察された。また、「蓄積データ」実施による「児童・生徒の変化」については、学校生活場面だけではなく、授業場面においても、教師自らが導入し、その活用方法まで確立されたことから、本プロジェクトは教師の指導行動を教師のメタ認知の向上を通じて改善し、その有効性をさらに高めることに対して、一定の知見を提供しうるものと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 村上達也・福住紀明・吉本恭子・鹿嶋真弓	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 「蓄積データ」の有効性に関する予備的検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高知大学 学校教育研究	6. 最初と最後の頁 155-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鹿嶋真弓・吉本恭子・村上達也・福住紀明	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 「蓄積データ」のより良い活用に向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高知大学 学校教育研究	6. 最初と最後の頁 147-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鹿嶋真弓・吉本恭子・村上達也・山口正二・中村正巳
2. 発表標題 いつもの指導場面から子ども対応のヒントを見いだす「蓄積データ」の活用
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鹿嶋真弓・村上達也・福住紀明
2. 発表標題 「蓄積データ」の効果検討 - 教師教育のための新しい方法論 -
3. 学会等名 日本教育カウンセリング学会第16回大会
4. 発表年 2018年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 鹿嶋真弓・石黒康夫・吉本恭子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 192
3. 書名 子どもの言葉で問を創る授業 中学校編	

1. 著者名 鹿嶋真弓・石黒康夫	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 160
3. 書名 子どもの言葉で問を創る授業 小学校編	

1. 著者名 鹿嶋真弓・石黒康夫	4. 発行年 2019年
2. 出版社 図書文化社	5. 総ページ数 110
3. 書名 30分でスッキリ！ブリーフミーティング	

1. 著者名 鹿嶋真弓・石黒康夫	4. 発行年 2018年
2. 出版社 図書文化社	5. 総ページ数 169
3. 書名 問いを創る授業	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村上 達也  (MURAKAMI TATSUYA)  (00743791)	高知工科大学・共通教育教室・准教授    (26402)	
研究分担者	鈴木 高志  (SUZUKI TAKASHI)  (90725938)	高知工科大学・共通教育教室・准教授    (26402)	
研究分担者	福住 紀明  (HUKUZUMI NORIAKI)  (80801878)	高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・講師    (16401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関